

NJ 素流協 News

令和2年11月10日
第190号

令和2年11月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

「新型コロナウイルス感染症流行の 影響分析と今後の展開」

ノースジャパン素材流通協同組合 理事長 鈴木 信哉

新型コロナウイルス流行の影響により、林業・木材産業にも多大なる影響が出ている。2～3月の中国国内での感染拡大により、中国向け丸太輸出に大きな影響を与え、輸出货量の多かつた南九州は丸太があふれる結果となったが、日本国内全体への影響はまだなかつたといつてよいと思う。

影響が大きくなつたのは、緊急事態宣言が出されてからである。5月に作成し、6月に開催された当組合の組合員会議において配られた資料には、「盆までを底として、盆明け以降徐々に回復する」との予測が書かれている。何故、そう思ったのか検証してみたい。

1. 川下（需要側）の動向

まずは需要側、最大の需要先である住宅産業の動向である。緊急事態宣言を受け、外出の自粛により住宅

展示場の閉鎖が続き、新規契約者の獲得は難しくなつた。注文住宅の場合、新型コロナウイルス禍の前に契約を受けていたので、影響は後ズレとなり、当初の落ち込みはそれほどはなかつた。しかし、建売分譲住宅の場合は完成在庫の営業ができず、この売払いが優先となるため、着工はストップし易く、即、影響が出ることとなつた。そのため、発注先の形態によりプレカット工場の操業率にはバラツキが出つつも、20%程度は減少することとなつた。

この時期は、公共建築物は地方公共団体の予算成立後、発注までの手続き、基礎工事などを考えると、木材需要は盆明け以降となるので、需要は例年通り低位水準である。こうした事態の場合、早期前倒し発注することが重要と改めて感じられた。土木工事も発注は行われたが、木

材利用の多い河川、農業土木系等は稲刈り終了後が多く、土木用材ハイシーズンは秋以降となるため、例年通り需要は低位であつた。

内装工事は、店舗の閉鎖や休業が続き、こちらも芳しくなかつた。広葉樹業界は、春先までに丸太手当てをして、その後伐採木の質の劣化が激しくなるので伐採が控えられ、需要は例年通り低位で影響はなかつた。

大きく影響が出たのはLP（広葉樹パルプ）である。東北で国産材LP100%の工場は、写真印画紙やイベントポスター等の印刷紙の需要激減でLP需要が急減し、多大な影響を与えたのである。

逆に好況になつたのはホームセンター需要で、ホームセンター向け製材品等は唯一好調になつたといえる。

2. 川中（木材加工工場）の状況

それでは、川中の状況を検証してみよう。

東北で需要の大きい合板・LVL工場は減産を余儀なくされた。住宅需要の減少もあるが、不況時に製品価格がワンコインまで下がった過去

の経験もあり、各社一斉に減産し、需給バランスを維持するため、生産量を落として、在庫量の減少を目指したのである。しかし、プレカット

の稼働率を見ると、減産量が大きいのではと感じる。これは、値が下がると予想した流通業者等の買い控え

も影響が無いとは言えないと思う(不況時には互いに思いやる行動も必要

かな〜)。また、建売分譲住宅に多量に納入していた工場には、それ

以上に影響が大きかったと考えられる。

いずれにしても、減産し易いのは5月の連休と夏休み前後であり、長めに工場を休止することが合理的であることから、盆前までは減産が続くと予想された。

製材工場はというと、先に述べた川下の状況に合わせて減産することとなるが、東北の場合は地場需要よりは、首都圏需要により大きく影響を受ける。とりわけ首都圏の製品市場の出入りの減少は、他の地域に比べて影響が大きかったといえる。その結果、製材工場も稼働率を落とす

結果となった。こちらも公共物件の動き出す秋以降は、住宅需要回復と相まって回復すると考えられた。

このようなことを総合勘案して、「盆を底として」の予測を立てたところである。

3. 川上(林業事業体)の状況

ここから川上の状況を検証してみよう。

今回の事案は、東北にとっては最悪のタイミングであったといえる。

東北は国有林の比率が高く、生産量の大きな事業体は、5月から11月12月くらいまで国有林の生産・造林請負作業に従事することが多い。造林では丸太生産は無いし、生産請負もほぼ間伐なので、生産量は皆伐に比較すればかなり小さい。その結果、

量産工場を中心として、夏場の丸太供給量の減少を見越して、春先に品質の劣化しない冬伐りの丸太を大量購入して備蓄するのである。そのため、国有林請負作業の終了した大手

林業事業体を含めて、1〜4月までに生産性の上がる皆伐を行うこととなり、最も生産量が多いのが、3月、

4月となる。

この時期に今回の事案がピッタリぶつかってしまったのである。

そのため、合板・LVLの減産分は、大手集成材ラミナ工場、製材工場にも流れ込み、どこの工場も「丸太在庫山盛り状態」となったのである。土場に3か月分ストックすると、

2割減産すれば4か月分となってしまう。その結果、5、6、7、8月と、8月まではストック消化にかかり、需要回復は9月以降となると予測された。現状では予測通り、8月を底として、9月から徐々に回復傾向となっている。

この間、素材生産業は山元での丸太販売ができず、少しずつ在庫を納入することとなり、仕事を素材生産

から森林整備へ回したり、公共事業の支障木伐採や一部休業等、供給量を絞らざるを得ず、多大な影響を受けた。

今後については、新型コロナの再流行の状況にもよるが、経済の復活との両立を考えれば、徐々に回復が続いていくと考えられる。

4. 今後私たちが為すべきこと

今回の経験を踏まえ、今後への必要なことを最後にまとめてみたい。

▽ 不況時には、需要の緊急創出が必要である。補助金が使われるものを含めて、国・地方自治体の早期前倒し発注に最大限尽力する

▽ 木材製品の値下がり・値上がり を期待する相場商売を自粛するため、(株)全国木材組合連合会の中に流通部会を設けて、宣言を発する

▽ 現在進められている住宅需要から非住宅需要を拡大するほか、家具、木工品、箱材、木材成分利用製品等、2次・3次加工分野を、林業・木材産業に加える

▽ 合板の利用分野を構造用合板、複合床板基材のほか、型枠合板、仮囲い等、多分野に拡大する

▽ 事案発生時期に合わせて、民国合わせた生産調整・販売調整のシミュレーションを検討しておく

何よりも、川下から川中、川上への、正しい中立的な情報の早期伝達が最大のカギである。

トピックス

「いわて県産木材等利用推進フォーラム」開催

10月13日、盛岡市のいわて県民情報交流センター・アイーナにおいて、岩手県と岩手県木材産業協同組合主催の「いわて県産木材等利用推進フォーラム」が開催された。第1部では、

県産木材等利用推進をテーマとし、秋田県立大学木材高度加工研究所中村昇教授が「これからの住宅業界ー東北の豊かな森林資源を活かすためにー」と題して基調講演を行った。続いて盛岡森林管理署 宮沢一正署長のコーディネートによる座談会が開かれた。

午後の第2部は、木質バイオマスエネルギー推進をテーマとして、(株)大仙バイオマスエナジー 金井義博代表取締役の基調講演と、パネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは岩手大学農学部森林科学科 伊藤幸男准教授がコーディネートを務め、金井氏のほかに当

組合員(株)古里木材物流 畠山正代表取締役が加わり、林地残材の徹底的活用による地産地消の木質バイオマス発電について話し合った。

並行して館内のギャラリーでは、県内各地から森林組合や製材工場が県産材を用いた自社製品を持ち寄り、展示を行った。

全素協 第137回理事会開催

全国素材生産業協同組合連合会第137回理事会が10月15日、東京都内において開催され、当組合鈴木理事長が出席した。令和2年度の全素協行事等の協議のほか、「令和3年度森林整備のための予算の確保等について」として、1. 森林整備事業予算の拡充について、2. 林業の成長産業化を促進する施策展開について、

3. 林業事業体の経営強化について、4. 国産材の需要拡大についての4項目からなる要望書を採択した。恒例の国会議員や林野庁への東京での要請行動はコロナ禍のため行わず、各団体の所在県の国会議員に対して

地元で個別に行うこととなった。

「地域再生シンポジウム2020 in 旭川」をオンライン開催

(国研) 森林研究・整備機構森林総合研究所北海道支所は10月20日、「地域再生シンポジウム2020 in 旭川」を開催した。同シンポジウムは北海道・東北地域の産学関係者が集まり、広葉樹資源をもとに地域の再生を図っていく議論の場として

開催されているもので、今年で5回目となった。今回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、YouTube(ユーチューブ)を介したライブ配信により行われた。

視察レポート 「花巻おもちゃ美術館」

10月某日、全国で5館目となる、花巻おもちゃ美術館を視察しました。美術館は、市内マルカンビルの2階にあります。マルカンビルは元々老舗百貨店でした。建物の老朽化と耐震不適合により閉店することになり

ましたが、地域住民の熱い思いによりリノベーションしたうえで6階の大食堂を再開することになりました。リノベーションの中心人物、(株)小友木材店(当組合員) 小友康広代表取締役は、研修で訪れた東京おもちゃ美術館に強く惹かれており、将来を見据えた自社の経営方針にも合致すると考え、マルカンビル2階におもちゃ美術館を設立し運営することを決めたのだそうです。ビルの耐震工事と並行して美術館の工事を進めたため、予期せぬ事態で完成が遅れました。コロナ禍の不安な社会状況となりましたが、7月20日に無事開館し、



入館者数も順調に伸びているとのこと。「マルカン大食堂で食事をして下りてくるお客さんに寄ってもらおう」というコンセプトもうまくはまっているようです。

ビルの2階に上がり、真っ先に目に入るのは、空間を仕切るトンネルのようなアーチと林立するシラカバの幹。アーチは釜石線めがね橋をモチーフにしており、全国で有名なシラカバ林とともに、岩手の文化や歴史を表現するために取り入れたとのこと。他にもわんこそばやブドウ、マルカン大食堂ソフトクリームといった地域の名産品が館内で重要なアイテムになっています。

靴を脱いで館内に入り、足の裏で感じるのは床板の当たりのやわらかさ。窓がなく、アーチの仕切りもたくさんあるのに暗さや狭さを感じないのは、白い照明をやさしく照らし返す床の無垢板のせいかも知れませんが。床板のみならず、内装には木材がふんだんに使われており、いつまでも足を伸ばして座っていたくなる居心地の良さです。使用した木材・

木製品は(株)小友木材店を中心に県内事業者により納入・制作されました。特に広葉樹については、30もの樹種が使われているそうです。どこにどの樹種があるのか、探して数えてみたくになります。

設置してあるおもちゃは、グッド・トイに選定されたものを含め、木製のものが多いです。見た目にも美しく、視覚・触覚・聴覚が心地よく刺激されます。中には剥皮して磨いただけの小枝や不ぞろいの積み木、直方体に二か所切欠きがあるだけのシンブルなブロックもあり、子どもたちは様々な遊びを作り出して没頭するのだそうです。物語を感じるテーマごとに仕切られた部屋には、オリジナルの木製「おもちゃ」が内装の一部となって存在しています。そのうちの一つを手に取り考えていると、学芸員さんが声をかけてくれました。きっと子どもたちの遊びの場面でも、さり気なくフォローしてくれるのでしょう。平野裕幸館長の「運営を支えてくれているのはおもちゃ学芸員スタッフです」という言葉を実感し

ました。ちなみに、学芸員(ボランティアスタッフ)の費用弁償では、マルカン大食堂の食事券が選べるそうです。ここでも、大食堂とともに盛り上がりたいたい、という心意気を感じます。「子どもたちを本気で楽しませようと作った」とのことでしたが、結局は大人(昔の子ども)も本気で楽しませてしまいました。

「モノを売るのではなく体験を売る新世代の木材店を作っていきたい」という設立時の小友代表取締役の思いと、「木に触れることから始まり、木と生きる人間に育ってほしい」という平野館長の思いが融合し、子どもだけでなく、普段は木と「素材」の一面で接することがほとんどの林業従事者にとっても、木が内包している様々な可能性を再発見し体感できる場の一つとなっています。きっと将来、この美術館で遊び育った子が、生活の場で大いに木を使ってくれることでしょう。

最後に、多忙な業務の中対応いただき、興味深いお話をしてくださった平野館長に、深く感謝申し上げます。

お知らせ

経営継続補助金第1次 公募結果と第2次公募 について

経営継続補助金は、農林漁業者が新型コロナウイルス感染症拡大による影響を乗り越えるため、感染防止対策や販路回復・開拓、経営継続のための取組を支援することが目的となっています。10月16日に第1次公募の採択者が公表されました。第1次公募では、当組合が支援機関となつて応募した8件のうち4件が採択されました。全国の採択件数は約6万8千件で、大半は農業関係です。林業関係は約300件とのこと。採択事業体名と採択テーマは経営継続補助金ホームページに掲載されています。

10月19日から第2次の公募が開始されました。組合員の皆様には既にご連絡しておりますが、経営継続補助金事務局への申請締切は11月19日(当日消印有効)となっているので

事務所で新型コロナウイルス対策グッズを設置

ご注意ください。

当組合事務所では新型コロナウイルス対策助成金の支援を受け、フレームや土台に県産スギ材を使用した透明仕切り板(パーティション)、非接触型体温計、マスク等を購入しました。できる限りの対策を講じて日々の業務に支障が出ないように努めて参りますので、皆様のご理解をお願い申し上げます。

冬伐りシーズンです

—フォトリゾーションシステムの活用を!—

これからの時期、伐採木への病虫害等の心配がなくなってきました。高齢級スギ、アカマツ大径材、広葉樹等の伐採を行う際に、納入先や価格等の情報を知りたいときには当組合のフォトリゾーションシステムをご利用ください。フォトリゾーションシステムの詳細は素流協ニュース第172号をご覧ください。

お問合せは営業企画部までお願いいたします。

組合ホームページ、リニューアルを計画中

当組合では、情報提供の窓口としてホームページのリニューアルに取り組んでいます。デザインを一新し、スマホとタブレットにも対応させるほか、閲覧者が文字サイズを設定できるようになります。利便性を高めたい新しいホームページの公開は、来年1月下旬の予定です。

国有林素材山元委託販売 10月度販売終了分

管理署	数量(m)	販売区分	入札日
岩手南部森林管理署	619	一般・合板・低質	令和2年10月9日(終了)
岩手北部森林管理署	646	一般・合板・低質	令和2年10月12日(終了)
岩手南部森林管理署 遠野支署	224	一般・合板	令和2年10月14日(終了)
盛岡森林管理署	908	一般・低質	令和2年10月21日(終了)
岩手北部森林管理署	1,088	一般・合板・低質	令和2年10月29日(終了)

※詳細については、営業企画部までお問合せください。

肝心カナメの書類作成 6

—〇〇林業のTくん、初めて作成した伐採届が無事に受理され、適合通知書を手にしてほっとしたのもつかの間、今度はその伐採した材を、N J素流協を通して納入するためどうするか調べるよう、社長から言い渡されました—
T「N J素流協を通して納入か...。ええと、N J素流協といえはまずコレだな。」

経営計画認定書等・伐採届適合通知書等

・納入時の納品書に、対応する伐採根拠書類の「土場名」を記入する
・納入開始前に、伐採根拠書類により材の合法性を確認しているため、書類を事前に提出することが必要
・納品書に記入された「土場名」を介して材と伐採根拠書類をひもつけている
とも書いてあります。「こでTくん、はたと思いました。」

Tくんは、N J素流協の「事業者認定研修」資料と、自分が調べたことをメモしたノートを再び開いてみました。そもそも、この資料を読むことから始まって伐採届を出したのです。納入にあたってのあれこれも書いてあるに違いありません。しばらくページをめくり、探していた項目を見つけました。それによると...。
・納入開始前に、伐採根拠書類をN J素流協に提出する(伐採現場)ごとに「土場名」をつける)

・伐採根拠書類は、主に国有林売買契約書等・保安林内伐採許可書等・

T「納入前に伐採根拠書類を提出するのはわかったぞ。今回は△さんの山の適合通知書を出すんだな。それから、伐採根拠書類と納入した材を結びつけるための「土場名」をつけて、納品書にも同じ名前を書く、と。でも、結びつけて証明する「合法性」って何だっけ?何のためにそれを証明するんだっけ?確かどこかに書いてあったと思うけど...。」

※これはフィクションであり、実在する人物・団体とは一切関係ありません。

〜つづく〜

ちよつと気になる木の話

52

全国平均値と林業施策

— 全国平均値は、

地域では違和感? —

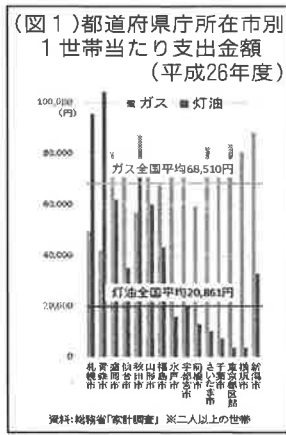
全国平均値は、地域データの上下幅が小さい場合は全国どこの人でも納得できる。しかし、上下幅が大きすぎる

と納得できない地域の人も出てくる。

例として、全国のカス・灯油の支出金額を見てみよう(図1)。

カスの全国平均を見ると68千円で地域による上下幅はそれほどない。片や灯油は全国平均

21千円である。しかし都市部や南国でほとんど支出がない一方、北国の札幌・



青森は約100千円である。よく考えれば気候が違うので支出の差も当然だが、全国平均21千円という金額だけを見ると、日本の家計における灯油代は大したことないとなり、施策上はガス

よりウエイトが下がることとなる。その結果が北国の断熱住宅仕様や薪ストーブ需要につながり、我が林業・森林業界にも大きな影響を与えることとなった。

さて、本題に入ろう。全国の素材生産の伐採・搬出コストである。全国平均は主伐で6,342円/m³、間伐で9,333円/m³と言われる(平成22年

版森林林業白書より)。木材収入を上げるにはこのコストを下げる必要がある。

このままでは山主が再造林経費の自己負担分を立木代金で賄えず、

結果として再造林が進まない状況となる。

山元の収入は次の式となる。

立木価格Ⅱ(丸太売り上げー伐採搬出

コスト)×0.8(立木から丸太への歩

止り)。具体例として、1,000m³の材を7千円/m³の経費をかけて10千円/m³で売ったとすると、

「10千円/m³×1,000m³(丸太の売り上げ)ー7千円/m³×1,000m³(伐採搬出コスト)」

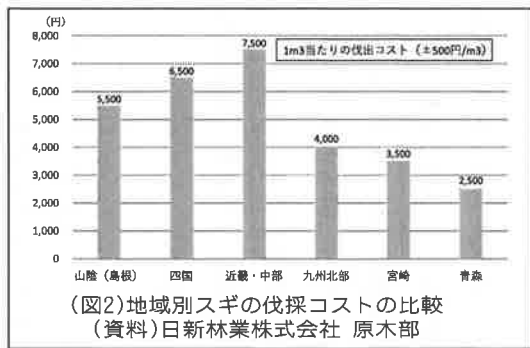
×0.8=2,400千円、つまり2

40万円である。

山元の収入を上げる一番の鍵は、伐採搬出経費である。図2を見て欲しい。

全国平均6,342円/m³というが、

地域別にみると2,500円/m³~7,500円/m³とばらつきがある。とな



ると、全国平均値をベースにした議論に

は多少

疑義が

出まし

まう。全国を

知る専門家から言わせれば、地域ごと

に山の傾斜・林道密度・作業システム

の違い等条件が違うので経費の違いも

当然でしょう、となる。でも現地へ行

くと、これくらいの条件ならコストを

安く伐採搬出している地域もあると感

じられる場合も多い。全国平均よりコ

ストの高い地域は、コストの安い地域

へ勉強に行つて、コストを下げるノウ

ハウを学ぶことが重要である。

以前、高性能林業機械を間伐補助金

算定の生産性に組み込むべきとの指摘

があつたが、普及率が30%~50%を超

えないと意味をなさない、逆に組み込

まない方が、導入のメリットがわかつ

て機械の普及が進む、と先延ばしにし

た経緯がある。しかし皆伐の場合、高

性能林業機械の有無は補助金とほぼ無

関係である。全国的平均値より高いと

ころの努力が必要である。

先ほどの計算式のもう一つのカギは、

丸太の運搬コストである。道が広い北

海道でもフルトラレーラーの普及は極め

て低い。聞けば、山からトラック1連・

2連積みで遠くの工場まで運ぶという。

中間土場を設けてフルトラレーラーで運

ぶのは積み下ろしが二度手間だとい

う。中間土場とフルトラレーラーの導入によ

り、径級・品質ごとに選別して付加価

値生産性を上げることの意味があると

説明すると、そういうことかと。運搬

コストの低減と付加価値の向上はセッ

トである。是非工場までの運搬コスト

の全国統計、平均値も見てみたいもの

である。

令和2年10月分の販売実績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	11,107	125.6	87.4	7,080	111.9	46.7	18,187	119.9	65.3
カラマツ	4,231	112.1	102.5	128	54.3	41.8	4,359	108.7	98.3
アカマツ	2,607	75.7	83.6	167	56.1	29.1	2,774	74.2	75.1
その他	0	*	*	567	134.8	70.8	567	134.8	70.8
合計	17,945	111.8	89.9	7,942	109.1	47.2	25,888	110.9	70.4

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	6,275	174.8	85.9
カラマツ	2,719	91.9	52.0
アカマツ	1,619	212.3	173.4
その他	59	77.6	14.7
合計	10,672	144.5	76.9

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m³)	製材・集成材・その他用 (m³)	計 (m³)	燃料用 (t)
スギ	54,329	44,681	99,009	34,184
カラマツ	27,881	1,880	29,761	20,357
アカマツ	20,181	8,208	28,389	8,284
その他	0	3,675	3,675	672
合計	102,390	58,443	160,834	63,497
目標達成率 (%)	45.5	26.6	36.1	48.8
計画量	225,000	220,000	445,000	130,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和2年10月の需給動向】

- 製材、集成材、合板の原木の引き合いが強まっており、11月以降は通常の生産体制に近づく。
- 合板工場を中心にカラマツの引き合いが強まっているが、11月以降はアカマツも引き合いが増える。
- 製紙向け広葉樹原木の引き合いが低迷しており、その影響で製材用広葉樹原木が不足している。

耳からウロコ

天然秋田杉純林物語

— 何故純林なのか? —

天然秋田杉の本場には純林が存在している。有名な上大内沢の純林はなぜ存在しているのか? また奥地の山林では、斜面に天然杉が散在しているのが確認できるが、この奥山と里山の純林は何が違うのか?

秋田で教師をしながら郷土の歴史を調べていた古老の話である。明治以降も住民のエネルギー資源は薪炭に変わりはなかった。集落の薪炭確保のため、里山の天然混交林だった林分では、伐採でできた空間にスギの枝を下げて土を被せる伏条更新を行うことを条件に、広葉樹の利用を認めてもらっていた。これを長年繰り返した結果、天然杉の純林が形成されたという。

一方奥山には集落がないため薪炭需要もなく、純林の形成には至らなかった。いや待てよ。奥地にある天然木曾檜の純林も同じだったことを

思い出した。航空レーザー写真を見た時、天然木曾檜林分の中に黒い丸状の固まりが点在しており、確認したところ炭窯の跡であった。里山と同様、奥山でも広葉樹を薪炭利用した結果が純林に至った経緯であろう。

天然秋田杉は佐竹藩「国の宝は山なり、然れども…」天然木曾檜は木曾五木伐採禁止という江戸時代からの流れを受けているが、どちらも古くは「尽山(伐採され山に木がなくなること)になりけり」とあり、樹齢250年〜280年生が多い。植生の専門家ではないが、一斉に笹が枯れて天然更新したのかもしれない。

しかし、里山といっても案外奥地に純林がある。古老の話によれば、縄文の遺跡や集落の歴史から見ると、奥の高台の方から先に集落ができたという。よって、今では人の少ない奥山にもかつては人が入り、純林が形成されていたことになる。人間営みがつくった天然秋田杉、天然木曾檜の純林である。天然林施業の結果の針葉樹純林であろう。